



美しい格子戸の町並み

の造りに文化的価値が認められ、珍重されているほどだ。
 しかし、幸吉らにとっては、この時代、鳥取城下町の発展を阻害するとも、そこに住む人たちの生き方（消極性）をあらわすものとしてイメージされていたということなのだ。
 商家の主人は、うすぐらい店の奥に座ったまま格子戸越しに客の往来を見ている。煙管をくわえ、時々おもしろく咳ばらいする。こちらから格子戸を越えて客に接しようとはしない。網を張って虫を待つ蜘蛛に似ている。
 そのうえ、
 「買ってもらう」
 というより
 「売ってやる」
 というような気風がある。
 だから客に心から「ありがとうございます」とは言わない。
 表では士族に低頭し揉み手しながらも、うらでは士族を蔑む、そんなあやうい所に均衡を保っている商家のひずんだ〈商魂〉と言っている。
 いずれにしても城下町という地域に安住し、そこから出ようとしない。現状に不満を持ちながらも、その不満と懇ろにつき合おうとする。ちよつと自虐的などころもある。そのくせ、尊大さもすっかり身につけている。

商 店 数 (明治15年)			
	卸売商	仲買商	小売商
鳥 取	2	20	1,368
米 子	33	17	1,037

(『鳥取商工会議所100年史』)

児嶋商店は瓦町新地の地続きである。演説会の当日は酒がよく売れる。聴衆は酒を飲んで氣勢をあげるのだ。

「弁士さままね」

ユキは苦笑する。

上村文太郎が店をのぞく。演説会に幸吉を誘うが幸吉は黙って首を振るだけだった。改革を好む幸吉だが、こういう動きには賛同できなかった。

「悪いのはみんな廃県のせいだ」と言うが、そんなことを言つとるから、ますます困窮するんだ」

「格子戸主義」との対決

明治十四年（一八八二）九月十二日。

鳥取県再置は実現したが、しかしだからと言って直ちに鳥取城下が活気づくかという、そうはならない。古い体質がカサブタのようにこびりついている。

「格子戸主義」と言う。

格子戸は商家の表構えとして一般的なものだ。具体的には出格子、腰格子がそうである。格子戸自体、わるいわけはない。二十一世紀の今日では、こ